

海のない長野県。海に対する県民の想いは人一倍です。昔の信州人は、遠い海から届く塩や海産物を大切に味わいました。現在は、隣県での海水浴が夏の楽しみです。また日本海と太平洋に注ぐ大きな川の原流域でもあります。海と日本プロジェクトin長野では、地元と海のつながりを学び、海をより身近に感じるために活動しています。2018年は活動の柱の1つとして「信州 塩をめぐる冒険」を実施しています。

信州 塩をめぐる冒険

塩は、海なし県の信州でとても貴重なものでした。どこで作られ、どのように内陸部へ運ばれ、利用されてきたのか？その歴史や文化を学ぶことで、信州と海とのつながり、海の大切さを感じます。参加者は、大町市、塩尻市、茅野市の小学生20人です。5月19日には大町市で結団式を行い、長野県立大学の中澤弥子教授からミニ講義を受けました。3つのグループに分かれて地域ごとにテーマを設定してフィールドワークを行い、8月の夏休みには富山に海を感じ・学ぶ旅にでかけました。学んだ成果は3グループごとに手作り新聞にまとめ、10月には長野県立大学で学習の成果を発表する「信州 塩サミット」を開催します。

結団式

5月19日、長野県大町市の博物館「塩の道ちようじや」で、結団式が行われました。結団式では、子供たちがどんなことを学びたいのか一人ひとり発表しました。長野県立大学康発達学部 食健康学科の中澤弥子教授による、海と塩に関するミニ講義も行われました。中澤教授は塩イカや年とり魚のことなど、海の恵みである海産物が生活の中でどんな存在なのかを中心に分かりやすく解説してくれました。



長野県立大学中澤教授がミニ授業

大町チーム

結団式の会場「塩の道ちようじや」がある、大町市の子供たちです。大町市は、糸魚川と松本平を結ぶ千国街道=通称「塩の道」の宿場町として、古くから栄えました。大町チームのフィールドワークテーマは、塩や海とのつながりです。「塩の道ちようじや」のスタッフから学習をサポートしていただきました。



大町チームの子供たち(結団式は1人欠席)

塩尻チーム

塩尻市の地名には、「塩」という字が含まれています。それはどんな由来なのか、海とどうつながりがっているのか塩尻チームのフィールドワークテーマです。学習をサポートするのは「しお研究会」の会長、加藤光久さんです。



塩尻チームの子供たち

茅野チーム

茅野市は、古くからの地場産業として、天然角寒天づくりが有名な地域です。その材料は、海藻。どうして茅野で寒天が名物になったのか？ その理由、そして海とのつながりを、フィールドワークで調べます。「NPO法人 信州協働会議」と「繋INC.〜つなげるいんく〜」のメンバーが学習をサポートします。



茅野チームの子供たち

大町は瀬戸内海とつながっていた

大町チームの子供たちは、長く小中学校の教員を務めていた元大町市教育長の荒井和比古さんから、大町に運ばれていた塩がどこでつくられて、どのように運ばれていたのか学びました。

南北に長い長野県には太平洋側と日本海側の両方から塩が運ばれ、太平洋側からの塩を南塩、日本海側からの塩を北塩と呼んでいたそうです。さらに荒井先生が用意してくれた資料をみて、産地が塩の名前に付いていることが分かりました。

江戸時代に運ばれた塩の量や値段を記録した資料で、例えば「富浜塩 六俵」「三原塩 七百五拾俵」「立ヶ浜塩 千百貳拾俵」などと記されていました。この地名を地図帳の索引で調べていくと、富浜と三原は広島県、立ヶ浜は山口県にあることが分かりました。遠く離れた瀬戸内海沿岸でつくられた塩が大町に運ばれていたのです。

瀬戸内海から新潟の糸魚川まではどうやって運んだのでしょうか？

荒井先生の質問に子供たちは「人や馬を使って運んで来たんじゃないかな」という答え。

しかし荒井先生は「たくさん荷物が積めるので船で運んだ」と教えてくれました。

船とは「北前船（きたまえぶね）」のことで、瀬戸内海から関門海峡を通過して日本海を北上し糸魚川まで運ばれ、糸魚川から塩の道を運ばれてきたのです。大町に運ばれた塩が瀬戸内海で作られていたこと、そして船で運ばれていたことに子供たちは2度驚いていました。



塩蔵を見学する子供たち

大町には塩流通の拠点があった

大町は塩の道の宿場町として栄えた町です。江戸時代後期の塩問屋の姿を今に伝える施設が、博物館として整備されています。「塩の道ちょうじや」＝「旧平林家」です。

糸魚川から千国番所を経て運ばれた塩や海産物は、大町で「荷継ぎ」されて松本へ運ばれました。一方、その一部は荷ほどこきされて、小売りに回されました。平林家は、そうした塩などを店売りしていたほか、味噌や醤油の加工も行っていました。

ちょうじやには塩を保管していた大きな蔵があります。当時は常に100俵近い塩が積まれていたということです。



塩の産地が書かれた資料



塩の産地を調べる

石仏に安全を祈った

大町チームの子供たちは、この日大町の塩の道を歩き、街道沿いにある石碑や石仏を観察しました。最初に見学したのは馬頭観音と庚申塔と呼ばれる石碑です。石を掘って文字が刻まれています。庚申塔の別の面には「右 善光寺道」「左 越後道」の字も見えます。

「延享元年」とも刻まれており、西暦1744年今から274年前で、その年に作られてといことです。

日本海側の越後(新潟)につながる塩の道「千国街道」と、善光寺の参拝につながる「善光寺街道」との分かれ道を教えていた道しるべでした。



馬頭観音(両面奥)と庚申塔を見学



右善光寺街道の文字



大黒天像

そこから少し歩いたところにあったのが大きな大黒天様でした。

建立は「嘉永5年」、高遠領非持村の石工、伊藤徳十、留十が作ったと書かれています。嘉永5年は西暦1852年で、今の伊那市高遠の石工が、自分の作品の証として名前を刻んでいたのです。



さらに移動して「佐野坂西国三十三番観音像」と呼ばれる観音像を見学しました。何番目かの番号を調べると十九番と分かりました。峠道には、少し離れた斜面に観音像がありました。男子2人が登って石仏の裏に刻まれた文字を確認して書き写してくれました。「高遠 片倉村石工 伊藤堅吉」と刻まれており、この観音像も高遠石工の作品でした。

三十三体の観音様は、信州と海とをつなぐ「塩の道」を歩く人の道しるべの役割があったのに加え、大変な道中を「無事に帰れますように」と人々がお祈りの対象にしていたことを教えてもらいました。

分水嶺から日本海と太平洋に注ぐ

塩尻チームのフィールドワークの目的地の1つは分水嶺です。

分水嶺とは降った雨が北の日本海に流れるのか、それとも南の太平洋に流れるのかを分ける場所です。塩尻市の善知鳥峠には川の源流域で日本一長いという分水嶺があり公園に整備されています。



池から2つの方向に水が流れ出す

「1つの場所から2つの海までつながってるって、すごい」と子どもたち。また「こんな小さな池みたいところから、海につながっているのもびっくり。もっと、ぶわ〜っとスケールが大きい所かと思ってた!」と話してくれる子供もいました。

海から遠く離れた塩尻に2つの海につながる場所があることを知って、子供たちはこのことをもっと多くの人に知ってもらい、塩尻の魅力の1つにしたいと考えています。



子供たちが分水嶺公園を訪れると、小さな池のような場所から2つの方向へと水が流れているのを見つけました。

説明看板には「善知鳥山川より天竜川をへて太平洋へ」「権現川より信濃川をへて日本海へ」と書かれています。



小さな泉から大きな海になるのはすごいと思った。
ここから、海を大切にしていきたい。

大矢ゆうき君が描いたイラストと感想

口留番所と塩尻の由来

塩尻チームの子供たちは、江戸時代の5街道の1つ中山道の宿場町、旧本山宿を訪ねました。本山宿は松本藩の南の境に位置しており、口留番所(くちどめばんしょ)が置かれていました。

口留番所は米や塩などの出入りを監視したり、制限していた松本藩の役所です。松本藩は日本海から運ばれる塩(北塩)の流通のみ許可していたため、値段が安い太平洋からの塩(南塩)が藩内に持ち込まれるのを、ここで制限していたということです。

この説明に子供たちは「同じ塩でしょ。止めなくてもいいのに」という感想も聞かれました。



本山宿の説明看板を見学する



本山宿が描かれた浮世絵のレリーフ(右)

本山宿は江戸末期に皇女和宮が14代将軍徳川家茂に嫁ぐ際、宿泊地になり総勢8万人が4日にわたって通行したという解説もありました。

塩尻の地名の由来は、塩の道の終点、しっぽに当たることからという説が主流ということです。

しかし、しお研究会の加藤光久さんによると別の説もあるそうです。それは「昔の都人が富士山のことを塩尻と呼んでいたことに関係するのでは」という説です。

塩の役割、食べる以外の使い道も

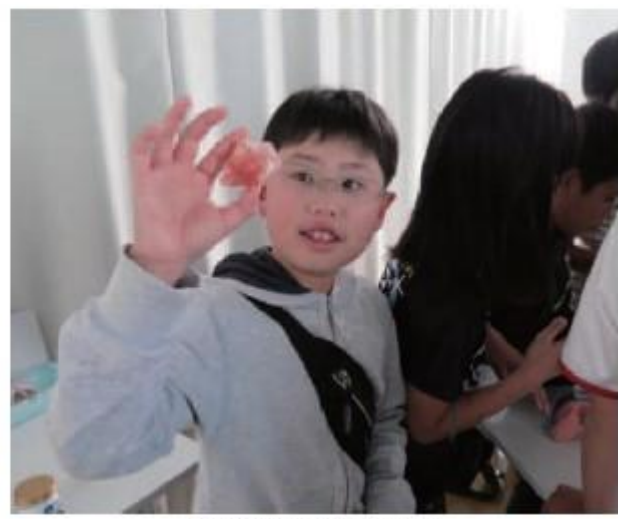
塩尻チームのサポート役、加藤光久さんは塩尻市の「しお研究会」の会長で、塩ソムリエです。海外を含むたくさんの種類の塩を集めています。子供たちはピンクの岩塩を手にとって珍しそうに見学していました。

加藤さんの解説によると、世界の塩の総生産量は年間約2.4億トンで、その65%が岩塩、34%が天日塩ということです。

天日塩の作り方もいくつかあり、藻塩焼きや揚浜式、入浜式などがあるということです。

日本人が一番多く食べたとされる塩は、瀬戸内海の入浜式塩田の塩とされています。海水に含まれる塩は約3%という説明を聞いて、子供たちは「え～、あんなにしょっぱいの？」と驚いていました。塩は人が生きていくのにとっても重要で、塩分が足りなくなると、のどが渇いたり頭痛が起こる脱水症状や、だるくなったりします。

参加者の一人は「塩が足りなくなると健康に影響があることを知ってよかった」と話していました。



ピンク色の岩塩を手にとってみる



現在は工場で作られる塩がメインで、食べる他にガラス製品などをつくるソーダ工業に使われたり、冬の道路にまく融雪剤にも使われているということでした。

寒天づくりを見学した

茅野市は寒天の産地として知られています。茅野チームの子供たちは地元の松本寒天産業株式会社の長寿寒天館を見学しました。

倉庫に入るととても強いにおいがしました。

寒天づくりの材料になる海藻、テングサがたくさん積んであります。

子供たちは海のおいと気づき、海を身近に感じ取りました。

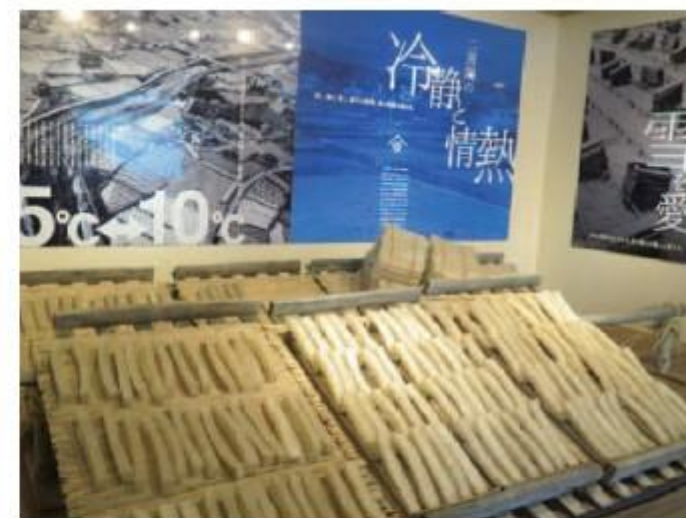


江戸時代の天保年間、茅野から関西方面へ行商に行った小林桑左衛門(こばやし・くめざえもん)が、寒さ厳しい茅野の気候に似ていることから、冬の農閑期の副業として寒天の製法を持ち帰ったことから、諏訪地方の産業になっていきました。諏訪地方独特の棒状の「角寒天」は、現在では茅野と諏訪地域で全国の生産量の100%を作っているということです。寒天づくりは、海藻を十分に洗浄し、大釜で煮詰めることから始まります。釜の大きさに子供たちは驚いていました。

製造過程などが展示された館内をめぐる「海藻はどうやって茅野に運ばれたのですか?」と質問が出ました。松本寒天の熊沢美典さんは「大量に内陸に運ぶために天竜川など、川を使って運ばれました。同時に茅野には海苔なども運ばれて来ました」と説明してくれました。寒天は海の恵みの一つで、海から遠く離れた茅野は寒天づくりを通じて海とつながっていることを学びました。



松本寒天産業を見学、奥に積まれているのがテングサ



長寿寒天館の展示

ポンポンゼリーを作って売った

茅野チームの子供たちは、地元の特産品で海の恵み、寒天を使ってデザートづくりに挑戦しました。作り方は長野県立大学の中澤弥子教授に手紙を送って教わりました。中澤教授が考えてくれたのは、フルーツが入って見た目も可愛い「寒天フルーツポンポンゼリー」です。



寒天フルーツポンポンゼリー



ラップを敷いてあるお椀にブルーベリーやスイカなど、カラフルなフルーツを5種類入れました。そこにお湯でといた寒天を入れてもらいます。お椀に敷いてあったラップをまとめて、キュッキュと絞って輪ゴムで止めて、寒天が丸く固まるように形を作ります。30個ほどつくり冷蔵庫で冷やして完成です。

子供たちがつくった寒天フルーツポンポンゼリーはくらの市で販売しました。「いらっしゃい!フルーツゼリーどうですかー?」「美味しいよ!」元気な声で呼び込みをすると「どれ?これ作ったの?じゃいただこうかな」お客さんが買ってくれました。その場で食べて「おいしい」と言ってくれるお客さんもいて、子供たちはとてもうれしそうでした。



第17回 <5>の市で販売



宮下あいかさんが描いたくらの市の様子



海と塩をめぐる冒険in富山ツアー

5月の結団式の後、大町、塩尻、茅野の3つのチームごとにフィールドワークを行い、それぞれの学習テーマを学ぶことができました。夏休みの8月2日(木)～3日(金)3チームが再び集まり、富山へ1泊2日の学習ツアーに出かけました。松本で合流して、岐阜経由で富山へ、2日目は富山から新潟経由で長野に戻るルートです。



ぶり街道を通過して富山へ

大型バスで富山へ向かうルートは岐阜経由、ぶり街道です。富山湾では冬に美味しいブリがとれ、出世魚でもあることから松本などでは「年取り魚」として食べる習慣があります。昔は、歩荷と呼ばれる人たちが雪の積もる野麦峠などを越えて運びました。ブリが松本に着くころには、当初の何倍もの値段になりましたが、その家の威厳や豊かさを表す象徴だったとも言われていたそうです。塩尻チームのサポート役加藤光久さんから「年取り魚」とぶり街道について学び、学習ツアースタートです。

海の恵みを味わう

バスは富山県射水市の「新湊きつとぎと市場」に到着。カニの大きな看板がお出迎えです。昼食はお刺身や焼き魚。お味噌汁の中にはカニが入っていて、海の幸がたくさん!「新鮮な感じ」「さすが海の近く。おいしい」「匂いがいい」と思わずパクパク。「エビのお刺身食べるの、初めて!」という子もいました。



新湊きつとぎと市場で海の恵みを味わう

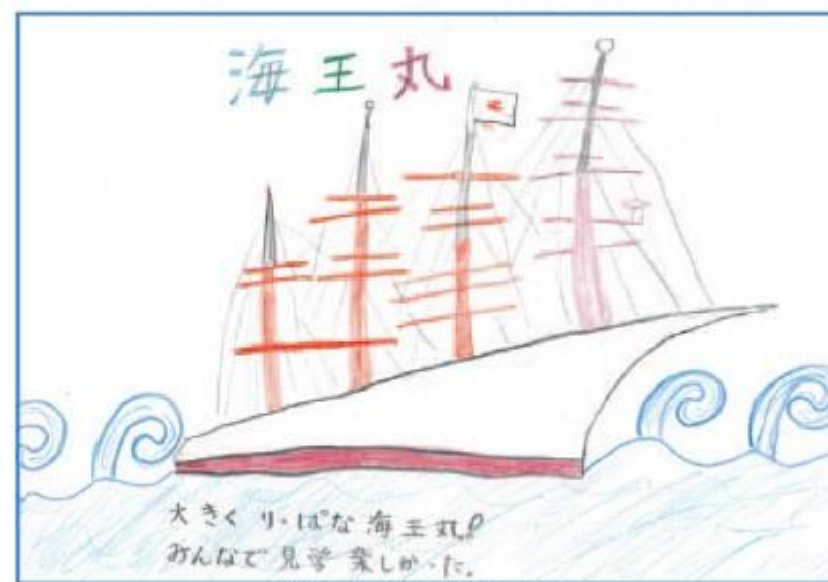
昼セリを見学

昼食の後、新湊漁港に水揚げされる魚のセリを見学しました。セリは、早朝行われることがほとんどで、お昼にセリを行っているのは、ここ、新湊だけとのこと。

「早朝のセリだけでは、夕方買った人の口に入るまでに半日たつが、昼にもセリを行えば、より新鮮なものを食べてもらえる」との思いから始まったそうです。セリが終わってバスに戻り、ボランティアガイドの方からさらに詳しい説明を聞きました。「近年、環境の変化から獲れる魚が変わり、漁獲量も減ってきた」という気になる話もあり「みんなの口に入るまでには、いろんな人の努力があるので、お魚は大事に、きれいに食べてね」と促され、子供たちは元気に「はい!」と答えていました。



海王丸の前で



高橋りねさんが描いた海王丸のイラスト

海王丸を見学

次に訪れたのは「海王丸パーク」。帆船「海王丸」は商船学校の練習船として誕生し、昭和5年の進水から約60年、地球を約50周航海をしたということです。

マイクロプラスチックのこと



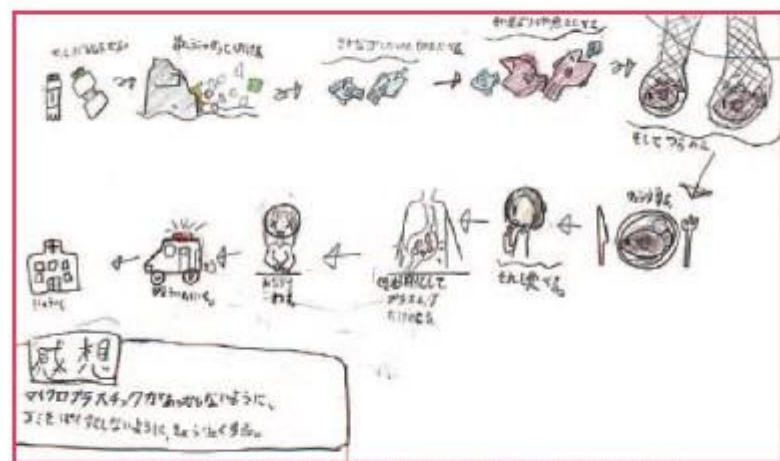
子供たちは氷見市の小堺海水浴場でビーチコーミング(漂着物の観察や分類)を行いました。案内してくれるのは「富山湾海岸をきれいにする活動の会」の俣本浩司さんです。砂浜には、流木や海藻の他、ビニール、ひも、外国語が印刷された袋など、さまざまなものが落ちています。あっという間に大きな袋6つがいっぱいになりました。



大きなごみを集めたところで、日本財団の宇田川貴康さんが実験を見せてくれました。ザルに砂浜の砂、洗面器に水を用意しています。ザルの砂を洗面器に入ると…

きれいに見えていた砂から、たくさんの小さなゴミが浮いてきたのです。自然のごみの他に細くなったプラスチック類も浮いています。

小さな破片になるとマクロプラスチックと呼ばれ、海や砂浜にも混ざっているということです。



マイクロプラスチックによる影響の恐れを描いた北澤みことさんのイラスト

人間が捨てたプラスチックやペットボトルなどのゴミが、川を伝って海へと流れる。そのゴミが波や岩で砕けて小さくなり、魚や貝の体内に入る。それを私たち人間が食べる、という循環になっている、ということです。子供たちは海から離れた長野県でペットボトルを川に捨てると海や人の体に影響を与える恐れがあることを学びました。

塩づくりを体験

海と塩をめぐる冒険in富山ツアーの2日目は、朝日町の夢創塾で行う塩づくり体験です。長崎喜一塾長やスタッフの皆さんの指導で、塩ができるまでの行程を学びます。

きのう小堺海水浴場で汲んでおいた海水を布でろ過してから四角い鍋に入れて煮詰めます。煮詰めるのには48時間かかるので、すでに煮詰めてある塩の塊を使って次の行程に進みます。この塩の塊は2週間前にここを訪れた名古屋の子供たちが持ってきた海水を煮詰めたもので、きょう持参した海水は次に来る子供たちの塩づくり体験に使われます。



両手に木の棒を持ち、拍子木を打つようにしてパンパンと袋をたたくのは、にがり通りの行程です。力作業に「疲れた～」との声も上がります。しかし「みんながしっかり叩かないと、おいしい塩にならないよ」と励まされ、交代しながら頑張りました。



天日干し、石うすでの精塩と交代で塩づくりの行程を体験し、できあがった手づくりの塩は海鮮ピザにかけて味わいました。お土産用にも2種類の塩をいただきました。

塩の道を歩く

バスは富山県から、塩の道の起点、新潟県糸魚川市へ。美山公園には当時の歩荷のブロンズ像があります。背中に背負子で大きな荷物を背負い杖を手にしています。顔を覗き込んだ子どもからは「怖い顔してる」という感想。長く過酷な道のりを歩く、歩荷の苦労が表情に描かれているのかもしれません。



そこからバスで約1時間、長野県の小谷村に到着。バスを降り、ガイドの松沢さんに案内してもらいながら、塩の道の難所、急な坂が続く親坂から牛方宿までを実際に歩いてみました。歩き始めてすぐに、「馬頭観音」が並んでいます。

急な坂や曲がりくねった道が続き、牛や人の人の水飲み場、荷を背負ったまま座って休める「休み石」など、説明を聞きながら進みます。



馬頭観音が並ぶ

大きな岩は錦岩と呼ばれ、道を行く人が目印にしていました。



休み石に座る

実際に急な細い坂道を歩いた子供たちは、大きな荷物を背負ったり、牛を何頭も引き連れて歩いた歩荷たちの苦労に思いを寄せているようでした。



錦岩

2日間を振り返って2日間の旅を通じて子供たちは色々なことを学び体験し感じ取りました。海と日本プロジェクトin長野実行委員会の高橋潤委員長は「教科書に載っていないような体験や、汗水流した体験は、得難いものです。フィールドワークで学んだ知識と、今回の経験が繋がってくれたことでしょう」「海を身近に感じて大切に守りたいと考え、さらに海の恵みに感謝して行動するきっかけになったと思います」と話していました。

この2日間で子供たちが感じたことの一部を紹介します。

- ・分水嶺を勉強し時は小さな川が海につながっているのが意外だったけど、実際の海を見てその大きさにびっくりした。
- ・海の近くで食べる魚やエビはとても新鮮でおいしかった。
- ・海から離れた長野にいるからと油断してごみをポイ捨てしないようにしなきゃと思った。
- ・塩は長い時間かけて作ることが分かった。
- ・海はきれいだった。きれいな海を守りたい。
- ・海岸にはごみがたくさんあった。ごみを減らしてきれいな海にしたい。
- ・マイクロプラスチック問題が悪化しないよう、ポイ捨てしないよう協力する。
- ・塩の道を実際に歩いてみて、あんなに険しいんだということに驚いた。

子供たちはフィールドワークと富山ツアーで学んだことを分担して手作り新聞にまとめます。

